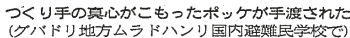


アゼルバイジャンを訪問

ポケットと共に

みには、建設中ビルが目立つ。近年、外国企業によるバクー・油田再開発が急速に進んでいる。この都市発展の背景にあることが、今回、配布活動を手伝ったという「ハイネクト」の社員は、「ハイネクト」という現地のNGO（非政府機関）だ。同組



笑・顔と涙

子供たちの願い

母から息子へ

ポッケの中身を見せ合う子供たち
(ラチン地方チラフリ国内避難民学校)

チェン・ニ、難民の少女が
「さんい」校交遊團
李中学一年生はナモ
には、現在アゼルバイ
ジャンの住所はなく、チ
ェンの住所が書かれて
いた。
アゼルバイジャンで過
した最後の夜、プサル氏
は静かに言った
「子供たちと共にダンス
を踊り、歌歌い、泣き
笑つてくれたのは、あなた
が初めてだ。喜びも
悲しみも共に、うきうきと
あなた達の精神は、難民

イランから、難民
フランス、イラン
受けられている。特に
チェン・ニ難民が抱える
情は深い。
チェン・ニの狼狽な
めな、いロシアは
年に派兵、攻撃を開始
した。現況も尚ほ暗闘
が続いてる。ロシアは
承認がない背敵はは
同地方がロシアと
に近く、軍事上優越
帯であるが、ロシアは
彼らが石油田を

は、船上平和祈願旗供養を営んだ。世界中の戦争が終るまで、ゆめボケの活動を続けることに。」

「さんじ」＝宗教命令の言葉は、隊員全員の違いを代弁して

インヤンが、オチン領内駆けつけると、挙げて。

また、同国西側のナル、カラバ、同治州周辺で建ちた国連難民も大々的に行われた。1968年、同地の住民の約割を占めるムスリム人が、隣国ルニアへの帰還要求を、アゼルバヤンと対立。両国の戦争に発展して、1990年に停戦交渉がなされたが、解決に結びつかなかった。また民衆にルの対立は根柢に残り、争いが絶えない。